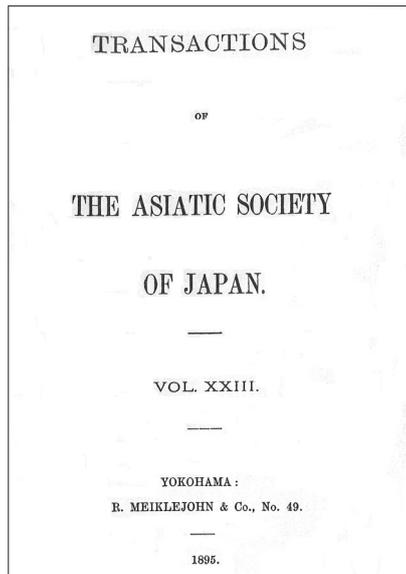


1895年(明治28年)に発表されたD.C. グリーン博士(Dr. Daniel Crosby Greene)による『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』(天理教一天の理の教え、以下『Tenrikyō』)は、外国人による天理教に関する最初の外国語研究論文であると考えられ、その内容やその後の外国人による天理教研究へ与えた影響において、非常に意義深い特筆すべき文献である。この論文は「日本アジア協会」が発行する『Transactions of the Asiatic Society of Japan』(日本アジア協会紀要)の第23巻1895年12月号に掲載された。



日本アジア協会は1872年(明治5年)に横浜で創立された日本最古の日本・アジア研究団体である。創設時の100名を超える会員には外国人の外交官、宣教師、商人などが含まれ、英国籍が過半数、米国籍が約2割、日本人会員として森有礼が一人入っていた。また『日本アジア協会紀要』は協会創立2年後の1874年10月から協会機関誌として発行が開始された。

日本や極東全般に関する研究論文集であり、その内容は、日本を中心とした歴史、言語、文学、宗教、芸術、地理、風土、考古学、植物学などあらゆる分野にわたっていた。<sup>(1)</sup>

グリーン博士の『Tenrikyō』は、この学術誌1895年12月号の24～74頁に掲載された約16,000語の英文での論文である。全部で9つの見出しに分けられ、その主な内容は以下の通りとなっている。

- 導入部分(見出しなし): 神道の概略、黒住教会や蓮門教会などの神道各派、近年台頭してきた天理教、天理教研究のための文献、仏教関係者による天理教批判文献
- The Origin of the Tenrikyō (天理教の起源): 教祖中山みきの生い立ち、教祖32歳の時の出来事(我が児の命に代えて預かり児救済)、教祖40歳の時の出来事(神の啓示)、神道・仏教からの反対攻撃、教祖の死と墓地、天理教の伸展と教勢の現況
- The Cosmogony (宇宙創成説): 天理教の十柱の神々についての概説、人間創造の話
- The Literature of the Tenrikyō (天理教の文献): グリーン博士が入手した文献(写本、聖歌、説教集、「神様の由来」、「神様のこうき」)、おふでさき約40首のグリーン博士による英語試訳
- The Hymns (聖歌、みかぐらうた): みかぐらうた、グリーン博士によるかぐらづとめ・よるづよ八首・12下り

の英語試訳

The Doctrines (天理教教義): 天理教教義に見られる思想(儒教、神道、仏教哲学)、月日、二神、“神おろし”、人類兄弟説、病氣救済、道徳観念、天理教におけるキリスト教の影響

Worship (礼拝): 音楽と踊りによる神への礼拝、牛込支教会、三島の教会本部の神殿と建築様式、かんろだい

Methods of Propagation (布教方法): 主要な方法としての公開説教、病氣治癒

Organization (組織): 三島の教会本部でのインタビュー、教会組織、信徒団体、教会長、布教師、教師の報酬

Conclusion (結論): 天理教の世論への迎合・合理主義、超自然主義的要素消失の傾向、比較宗教学の好例としての天理教

濱田泰三氏によれば、天理教教会本部がこのグリーン博士による英語論文の存在を知ったのは1928年(昭和3年)のことであり、この論文が発表された1895年から実に33年後のことであった。そして、それから約3年後の1931年、中西喜代造氏によるこの論文全文の日本語訳が、『天理時報』で1月8日号から9月10日号まで合計31回にわたり掲載されたのである。この日本語訳は、本島史料集成部編『中西喜代造集(前篇)』(本島社、1936年)に収録されている。

中西氏はこの日本語訳を発表したのち、『天理図書館月報』11号～13号(1932年)に『『グリーン氏天理教』に就いて』とのタイトルで、翻訳を通じての所感やこの英語論文の意義などを記している。また大久保昭教氏は、その著書『外国人のみた天理教』(天理教道友社、1973年)でこのグリーン博士の論文を取り上げ、その内容を紹介しながら、この論文の特徴、天理教研究における意義などについて考察している。両氏の論考についてはいずれ別の稿で取り上げたい。

この論文が『日本アジア協会紀要』1895年12月号に掲載される少し前に、実はその内容の一部がすでに英字新聞『The Japan Weekly Mail』に掲載されていた。このグリーン論文をよく見てみると、そのタイトルと著者名の後に「Read March 13th and May 22nd, 1895」(1895年3月13日と5月22日に発表)と記載されていることに気づく。この論文の内容は、同年の3月13日と5月22日に行われた日本アジア協会の会合で2回に分けて発表され、その報告内容の要旨が、『The Japan Weekly Mail』にニュース記事として掲載されているのである。この発表の内容がどのようなものであったのかは大変興味深いところであり、掲載されたニュース記事からその様子をうかがってみたい。次回から数回にわたり、その報告内容について見ていくことにする。

[註]

(1) 秋山勇造「日本アジア協会と協会の紀要について」『人文研究: 神奈川大学人文学会誌』152、2004年3月5日、71～82頁。

(2) 濱田泰三『やまとのふみくら』中央公論社、1994年、41頁。